

注目すべき植物群落・植生

環境省の「特定植物群落」「現存植生図における自然植生」、静岡県の「特定植物群落」「静岡県自然環境基本調査における調査対象社寺林」などから、本町の注目すべき植物群落・植生を選定しました。

その結果、原生自然環境保全地域における森林植生をはじめ、多くの特定植物群落や社寺林などが注目すべき植物群落および植生等としてあげられます。

本町の注目すべき植物群落および植生等(1)

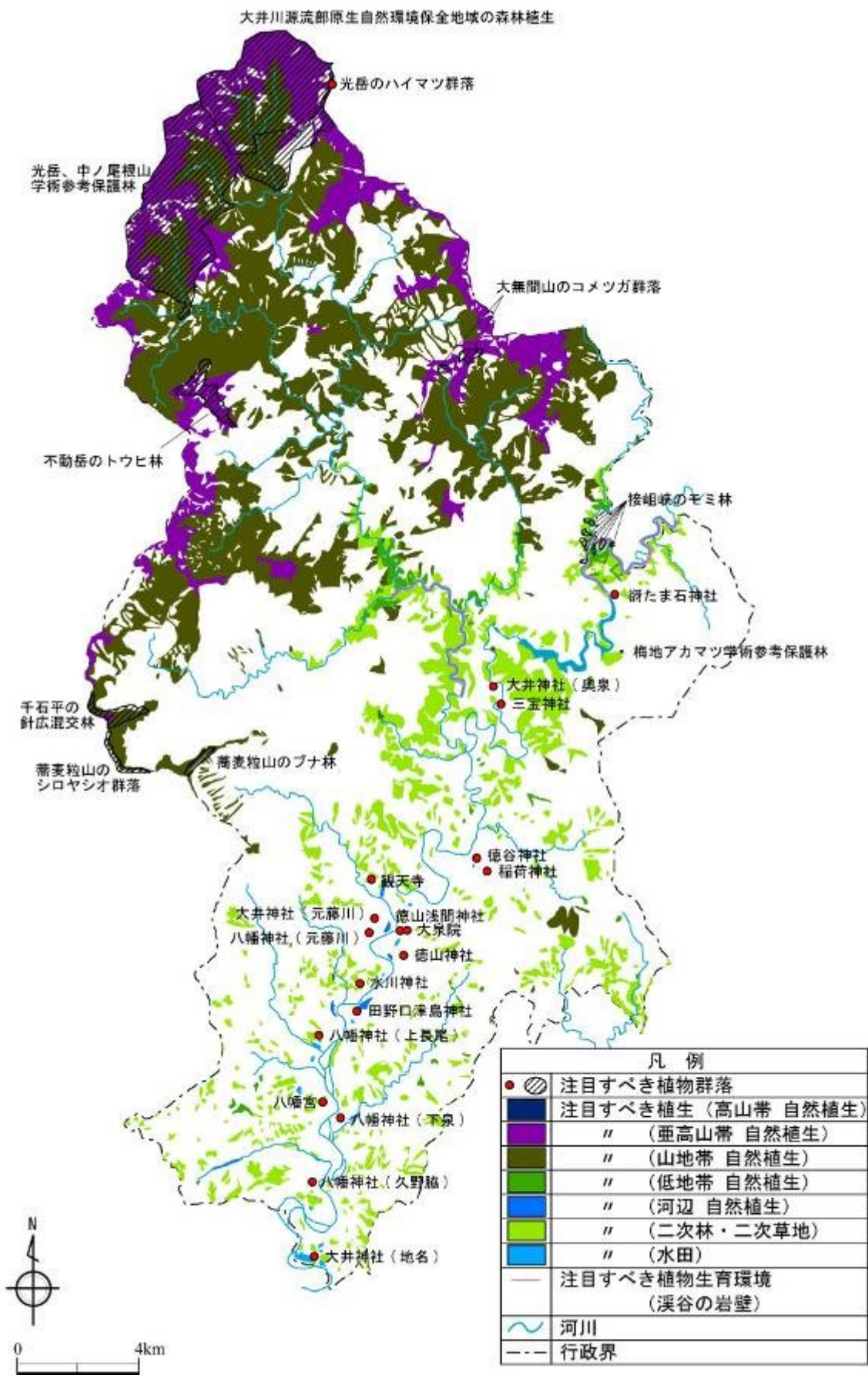
群落・植生の名称	概要
1 梅地アカマツ 学術参考保護 林* ¹	胸高直径70cm、樹高30mを超える見事なアカマツの樹林中、そこだけ異質な世界のように見える。大井川流域で最も樹木が大きく立派なアカマツ林として貴重である。
2 接岨峡のモミ 林	接岨峡の急峻な斜面の尾根上にカシ類を交えたモミ林が顕著な森林景観を作っている。比較的若い林分とみられるが、密度や規模において静岡県でも有数のものである。
3 蕎麦粒山のブ ナ林	蕎麦粒山から山犬段にかけての帯にはブナの巨木が繁り、原生的な世界が広がっている。ウラジロモミやツガの針葉樹が混交し、シナノキ、オオイタヤマゲツなども多く、南アルプスらしい混交林としてのブナ林となっている。
4 蕎麦粒山のシ ロヤシオ群落	蕎麦粒山から鋸山へ至る稜線部はトウヒ、シナノキ、ブナ、カエデ類の多い原生林で被われており、林内には白い花を咲かせるシロヤシオの巨木が群生し、開花期はすばらしい山岳風景となる。
5 大無間山のコ メツガ群落	大無間山の西側稜線に広がるコメツガの純林で、コメツガの巨大なものは胸高直径1mを超える。
6 不動岳のトウ ヒ林	不動岳山頂部の亜高山帯には、トウヒの原生林が純林を成して繁っている。その中でも不動岳山頂北側にある平坦地のトウヒ林は、樹高30mに達する巨木群で、すばらしい森林景観をつくっている。
7 大井川源流部 原生自然環境 保全地域の森 林植生	本州で唯一の原生自然環境調査保全地域に指定されている地域で大井川源流部に位置する。面積は1,115haで、太平洋岸における山地帯から高山帯に至る典型的な垂直分布が見られる。広大な寸又川流域の原生林の一角をなす貴重なものとして厳重な保護が図られている。
8 千石平の針広 混交林	広い面積を有する平坦な尾根にシラビソ、トウヒなどの常緑針葉樹を主とし、ダケカンバ、ブナなどの落葉広葉樹が混生する原生林が繁っている。樹木はいずれも巨木である。
9 光岳、中ノ尾根 山学術参考保 護林* ²	光岳から寸又川右岸の2,000mを超える山々を連ねる一帯で、大井川源流部原生自然環境保全地域を含む。自然が原生的な状態で残っている地域で、山地帯から高山帯に至る典型的な垂直分布が残されている。
10 光岳のハイマ ツ群落	高山帯の常に強風が吹き付ける風衝地に形成するマツ科の匍匐(ほふく)性常緑針葉樹ハイマツの群落で、イザルガ岳(静岡市)を含む光岳一帯に成立し、ハイマツの群落として南限にあたる。
11 大井神社 (地名)	旧地名保育園向かい側の小高い丘の社寺林。樹高15~20m、胸高直径30cm程のスギ・ヒノキの植林で、神殿の近くには比較的太い(胸高直径30~60cm)スギが多い。西斜面にはシイが多い。
12 八幡神社 (久野脇)	塩郷堰堤近くの小高い丘にある社寺林。スギ、ヒノキの植林が多い。樹高は20m前後で、胸高直径は20~30cmのものが多い。
13 八幡神社 (下泉)	下泉にある社寺林で、樹高20~25m、胸高直径20~30cm程のスギが広く植林されている。神殿と石段の近くには胸高直径60~70cmのスギがある。
14 八幡宮	下長尾にある社寺林で、神殿の横から後方には樹高25~30mのスギが10本ほど立ち、スギのほかはヒノキ、クスノキなどが登り斜面に密生している。神殿に向かって右側後方には竹林がある。
15 八幡神社 (上長尾)	上長尾にある社寺林で、全域スギ、ヒノキの植林である。神殿の前には樹高20~25mのスギが間隔を置いて20~25本立っている。神殿の後方登り斜面の林は密生している。
16 田野口津島神 社	全域スギの植林地で、神殿後方の登り斜面には細いスギが密生しているが、神殿の周囲には大木が10本前後ある。また、神殿に向かって右後方に県指定天然記念物の五本杉がある。
17 水川神社	山腹にあり、茶畑の間を通過して神社の林へと続く。鳥居から神殿までの石段の両側はスギ、ヒノキの植林で本数は多くはないが、どの木も高い(樹高25~30m)。
18 徳山神社	神殿に向かって左側にゆるい下り斜面があり、全域スギの植林地である。神殿と広場の周囲を大きなスギ(樹高30m)が囲んでいる。
19 大泉院	一部スギが植えられているが、スタジイ、アラカシ、クスノキ、イチイガシ、ケヤキ、カヤ、ツブラジイを中心とした常緑広葉樹林である。山門の右端に樹齢400年以上という大きなスギ(俗称:天狗杉)がある。

本町の注目すべき植物群落および植生等(2)

群落・植生の名称		概要
20	八幡神社 (元藤川)	万世橋を渡り、すぐ南の小高い丘に繁る社寺林。特に大きな木はなく太いものでも胸高直径30～40cmであるが、種類は雑多でスギ、ヒノキ、ツガ、スダジイ、ウラジロガシ、ツブラジイ、モミ、ウラジロモミなどが密生している。
21	大井神社 (奥泉)	奥泉の社寺林で、鳥居をくぐり石段を登る右側には竹林がある。左側にはカシ類が優占する樹高20～25mの樹林で、アラカシ、イチイガシ、スギ、イヌシデなど種類が豊富である。神殿の前の開けた広場(中学校跡地)の周囲には桜が植えられている。
22	徳山浅間神社	神殿の背後の斜面全域にわたる樹高25～30mのスギ、ヒノキの樹林で、シヤアラカシも混生している。神殿の前の左右に2本のスギの巨木(県指定天然記念物)がある。
23	観天寺	本堂の背後は竹林で、それ以外はほとんどスギ樹林である。スギ樹林は樹高20～30mに及び、本堂に登る石段の両側には樹齢200年程のスギが5～10本ある。
24	稲荷神社	茶畑を前にし、山を背にした小高い丘にある社寺林。ヒノキ樹林にやや大きなツクバネガシが混生する。林内にはアセビやミツバツツジなどツツジ科の樹木が優占し、林床にはミツバツツジの芽生えが多い。
25	徳谷神社	樹高25～30mのスギ樹林で、林床は植物の種類が非常に多く一面を覆っている。町指定史跡となっている小長谷城址がこの神社にあり、社寺林の中に本丸、二の丸の跡がある。
26	三宝神社	樹高25～30mのスギ樹林でツガもみられる。林内にはサカキ、アオキなどが密生している。鳥居をくぐると真正面にスギの大木(胸高直径1.3m)がある。
27	大井神社 (元藤川)	社殿を取り囲む樹高20m程のスギ樹林で、スダジイ、ツクバネガシ、イチイガシ、アベマキ、アラカシ、ハリモミ、クスノキなどの常緑広葉樹が多い。
28	筈石神社	石段を登る両側にある樹高15m程のスギ、ヒノキ樹林でツクバネガシが混生している。林内にはツクバネガシやツガの低木が多くみられる。
29	高山帯自然植生	現存植生図の高山帯自然植生。標高2,500m付近以上の高標高地に発達する植生で、本町では高山帯の風衝地で枝を横に這って生育するハイマツの低木林が存在する。
30	亜高山帯自然植生	現存植生図の亜高山帯自然植生。標高1,800～2,500m付近に発達する植生で、本町ではシラビソやオオシラビソ、キタゴヨウなどの常緑針葉樹林が主体となっている。不安定な場所にはダケカンバ林が成立する。
31	山地帯自然植生	現存植生図の山地帯自然植生。標高800～1,800m付近に発達する植生で、本町では山地帯自然植生を代表するブナ林がみられるが、ツガ林が主体をなしている。渓谷には小規模であるがシオジやトチノキなどの渓谷林がみられる。
32	低地帯自然植生	現存植生図の低地帯自然植生。標高200～800m付近に発達する植生で、本町では低地帯の上部に発達するモミ林が多い。渓谷には小規模であるがケヤキやイロハモミジなどの渓谷林がみられる。
33	河辺自然植生	現存植生図の河辺自然植生。洪水や増水により常に不安定な立地条件にある河辺には冠水に強いヤナギなどの群落が発達する。本町では、河川敷にコゴメヤナギの高木林やツルヨシ草地がみられる。
34	二次林・二次草地	現存植生図の低地帯代償植生のうち、薪や肥料など様々な資源を得る場所として維持管理されてきたいわゆる雑木林やススキなどの草地。二次林や二次草地を生育地とし依存する植物が存在するが、生活様式の変化に伴い管理が放棄され、遷移の進行や開発によりこれらの植物の生育が脅かされている。
35	水田	現存植生図の耕作地のうちの水田。本来の目的は食料(米)生産であるが、保水・遊水機能、水質浄化機能、気候の緩和や大地の安定化に寄与し、水生植物や湿生植物の生育を支えている。しかし、稲作の放棄による草地化、埋め立て、水田の乾田化、農薬などにより、水生植物や湿生植物の生育が脅かされている。
36	渓谷の岩壁	接岨峡や寸又峡といった深い谷を刻む渓谷の岩壁は、高い空中湿度に生育する着生ラン、湿った岩場に生育する植物、洪水や乾燥に耐える渓流植物など、渓谷の岩壁特有の植物がみられる。

注) *1,2: 旧保護林制度の名称。現在は、*1: 植物群落保護林(梅地のアカマツ林)、*2: 森林生態系保全地域(南アルプス南部光岳)・植物群落保護林(中ノ尾根山の森林)。

【資料: 日本の重要な植物群落(東海版) ・ 静岡県植物群落 - 静岡県の自然環境シリーズ、静岡県自然環境基本調査 社寺林調査報告書(中間報告)、自然環境情報 GIS データ 第2-5回自然環境保全基礎調査・現存植生調査】



注目すべき植物群落および植生図

【資料：自然環境情報 GIS データ 第2-5回自然環境保全基礎調査・現存植生調査】

(2)町内に生育する植物

植物は 1,874 種が確認されており、低地帯から高山帯までのさまざまな植物がみられます。巨樹が 39 本確認されています。

植物相の概要

本町の植物は 1,874 種の記録があり、標高差が大きいため、低地帯から高山帯までのさまざまな植物がみられます。本町は植物地理学でいう「ソハヤキ地区」の東限にあたり、同地区に特有なモチツツジ、イワユキノシタ、ナベワリなどが生育しています。また、地形や人間の関わりに応じて多様な環境が成立するため、それぞれの環境に適応したものが生育し、植物相の種類も豊富です。さらに、本町は接岨峡や寸又峡といった深い谷を刻む渓谷があるため、渓谷の岩壁に生育する着生ランや溪流植物などが本町の植物相を特徴付けているといえます。

本町の観光資源であるアカヤシオとシロヤシオはツツジ科の植物で、山地帯の尾根筋の岩場などに生育します。アカヤシオは 4～5 月に淡い紅色の花を、シロヤシオは 5 月～6 月上旬に白い花を咲かせ、春から初夏の山を彩ります。

なお、絶滅の可能性のある種として、アゼオトギリやカギガタアオイなど 121 種が確認されています。



アカヤシオ



シロヤシオ

【川根本町おろくぼからの自然散策ホームページ】

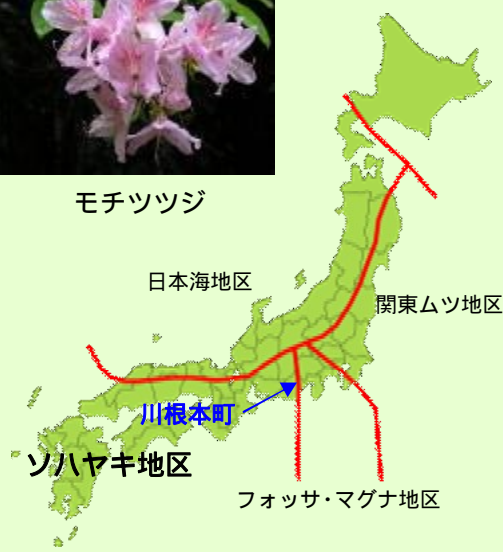
ソハヤキ地区とは？

ソハヤキ地区とは日本の植物区系（植物相を分布的な特性をもとに分けた地区）のひとつで、第三紀（約 6,000 万年前）から現在まで陸地だった九州、四国、愛知県以西の本州太平洋側などを含む地区を指します。ソハヤキは「襲速紀」と書き、南九州の古名である「熊襲（くまそ）」の襲、豊予海峡をさす「速吸瀬戸（はやみずのせと）」の速、「紀伊国（きいのくに）」の紀を組み合わせた言葉です。中国大陸西南部とも関係の深い植物が多くあります。

静岡県の植物分布は、大きく分けると東部・伊豆地域の「フォッサ・マグナ地区」、中部・西部地域の「ソハヤキ地区」に分けられ、本町周辺がその東限にあたります。



モチツツジ



【資料：フォッサ・マグナ要素の植物】

生育環境別の主な植物

生育環境		自然植生の植物相	代償植生の植物相
山地	高山帯	【ハイマツ低木林】 ハイマツ、ハクサンシャクナゲ、タカネナナカマド、ウラジロナナカマド、コケモモ、イワカガミ、コガネイチゴ、ゴゼンタチバナ、クロウスゴ、ガンコウラン、ミヤマダイコンソウ など	
	亜高山帯	【シラビソ林など】 シラビソ、オオシラビソ、トウヒ、コメツガ、ナナカマド、ダケカンバ、セリバシオガマ、オサバグサ、ミヤマアオスゲ、コイチヨウラン、ヒロハユキザサ など	【伐採伐跡群落など】 ミヤマウラジロイチゴ、ゴヨウイチゴ、ナナカマド、ダケカンバ、ミネカエデ、オガラバナ など
	山地帯	【ツガ林、イヌブナ林、シオジ林など】 ツガ、モミ、ミズナラ、ブナ、イヌブナ、ヒメシャラ、アセビ、チチブドウダン、ヤマイワカガミ、ハクウンボク、サワシバ、スズタケ、コカンスゲ、サワグルミ、シオジ、カツラ、アカヤシオ、シロヤシオ など	【シデ林、ミズナラ林など】 アカシデ、クマシデ、イヌシデ、ミズメ、ウダイカンバ、ヤシャブシ、オノオレカンバ、アワブキ、ダンコウバイ、ウラジロノキ、ミヤマハハソ、ニシキウツギ、ノリウツギ、ミズナラ、クリ、イヌザクラ、ウワミズザクラ など
	低地帯	【モミ林、ケヤキ林など】 モミ、ツガ、カヤ、ウラジログシ、アカガシ、ツクバネガシ、サカキ、シキミ、ミヤマシキミ、ヒイラギ、イロハモミジ、ケヤキ、クジャクシダ、アラカシ、ヤブツバキ など	【コナラ林、ススキ草地など】 コナラ、クヌギ、ミズキ、ヤマザクラ、ムラサキシキブ、コバノガマズミ、ヤマツツジ、ノガリヤス、タチツボスミレ、ササユリ、ススキ、ワラビ、ノコンギク など
	植林	【スギ・ヒノキ林、カラマツ林など】 スギ、ヒノキ、サワラ、カラマツ、モウソウチク など	
段丘・低地	耕作地	【茶畑、水田など】 チャノキ、ナズナ、ツククサ、コハコベ、メヒシバ、スベリヒユ、コミカンソウ、イヌビエ、コナギ、オモダカ、ウリカワ、キカシグサ、タネツケバナ、セトガヤ など	
河川	河辺自然植生	【ヤナギ高木林、ツルヨシ草地】 コゴメヤナギ、イヌコリヤナギ、ノイバラ、アケビ、イタドリ、アカネ、スイバ、ヤブジラミ、ツルヨシ、ミゾソバ など	
	渓谷の岩壁	サツキ、イワシャジン、ダイヤモンドソウ、ウラハグサ、ムギラン など	

【資料：静岡県植物誌 など】



コケモモ (高山帯)



オオシラビソ (亜高山帯)



アセビ (山地帯)



クジャクシダ (低地帯)



ノコンギク (低地帯)



ツククサ (耕作地)

絶滅の可能性のある植物

カテゴリー区分	絶滅の可能性のある植物
絶滅危惧 A 類(CR)	ジンリョウユリ、クソエビネ、アツモリソウ
絶滅危惧 B 類(EN)	ヤマソテツ、クラガリシダ、ミョウギシダ、デンジソウ、オオヤマレンゲ、シロモジ、ヒロハヘビノボラス、ヒツジグサ、 アゼオトギリ 、ミヤマスマシレ、ヒメビシ、ヤマホオズキ、タカネタチイチゴツナギ、シコクヒロハデンナンショウ、タカネナルコ、ハコネラン、フジチドリ、セイタカスズムシソウ、トキソウ
絶滅危惧 類(VU)	スギラン、タキミシダ、ナカミシシラン、ツクシヤブソテツ、タニヘゴ、イナデンダ、テバコワラビ、イワウサギシダ、サンショウモ、ミヤマツチトリモチ、オオビランジ、セツブンソウ、タマカラマツ、 カギガタアオイ 、エゾハタザオ、クモマナズナ、マツノハマンネングサ、 ヤシャビシャク 、キンロバイ、エンシュウツリフネソウ、チョウセンナニワズ、サクラスマシレ、ホソバハナウド、キョウマルシャクナゲ、クモイコザクラ、コイワザクラ、シナノコザクラ、キセワタ、ヤマジノタツナミソウ、タヌキモ、ニッコウヒョウタンボク、アキノハハコグサ、ヤナギタンポポ、クモマニガナ、ヤハズトウヒレン、チャボホトトギス、カキツバタ、ヒトツバテンナンショウ、スルガスゲ、ナツエビネ、コアツモリソウ、クマガイソウ、イチヨウラン、スズムシソウ、ウチョウラン、ニョホウチドリ、ツレサギソウ、ヤマトキノウ、マツラン、モミラン、ムカデラン
準絶滅危惧(NT)	ヤマシャクヤク、コオトギリ、キバナハナネコノメ、ミズマツバ、 スズサイコ 、タチキランソウ、アオホオズキ、オオヒキヨモギ、イヌノフグリ、ワタムキアザミ、イズハハコ、カワラニガナ、タカネコウリンカ、ミクリ、マメツタラン、ムギラン、エビネ、セッコク、クロヤツシロラン
現状不明(N-)	ヤツガタケシノブ、アオチャセンシダ、ヤマキケマン、キンチャクスゲ
分布上注目種(N-)	フジノデ、ヒメカラマツ、ミカワチャルメルソウ、トウヤクリンドウ
部会注目種(N-)	チチブホラゴケ、アオネカズラ、カラハナソウ、サクライラズ、ツゲ、キヨスミウツボ、ナベナ、イワシャジン、サワギキョウ、シデシャジン、ヤマアゼスゲ、アケボノシユスラン、ホザキイチョウラン、アリドオシラン、ヒトツボクロ
環境省レッドリストのみに掲載されている種	オクタマシダ(VU)、ミドリアカザ(CR)、ニッケイ(NT)*、コイヌガラシ(NT)、ハクチョウゲ(EN)*、タカネママコナ(VU)、カワヂシャ(NT)、オナモミ(VU)

注1) カテゴリー区分は、静岡県版レッドデータブックの区分に従った。カテゴリーについての詳細は「(4)絶滅の可能性のある動植物」を参照。

注2) 太字は種の解説あり。

注3) *の2種は栽培・逸出したものであるため、絶滅の可能性のある種の種数から除外した。

アゼオトギリ (絶滅危惧 B 類)

田の畦や湿地に生育する多年草で、茎は枝を分けて地を這い、立ち上がると草丈 10～40 cm 程度になります。7～8 月頃に茎と枝の先に黄色い花を咲かせます。圃場整備や湿地の開発により減少しています。

カギガタアオイ (絶滅危惧 類)

山地のやや陰湿な林内に生える多年草で、静岡県中西部と山梨県南部に分布します。柱頭の先が鉤のように曲がっていることが名前の由来です。葉は形がアオイに似て冬でも青々としており、花は落ち葉に埋もれるように咲きます。

ヤシャビシャク (絶滅危惧 類)

山地帯のブナ原生林に生育する落葉小低木で、大樹の樹幹や樹洞に着生します。和名は「夜叉柄杓」で、果実の形を夜叉(やしゃ)が持つ柄杓(ひしゃく)に見立ててつけられました。ブナ林の減少や栽培用の採取などにより少なくなっています。

スズサイコ (準絶滅危惧)

日当たりの良いやや乾いた草地に生育し、草丈 40～100 cm 程度で星型をした黄褐色の花をつけます。花は夕方から開き、翌日の朝日が当たると閉じてしまいます。草地の開発や草地の管理がされなくなり、生育地は少なくなっています。

巨樹・巨木林

巨樹・巨木林とは、長い年月生き続けてきた古い大きな木や、それらが集まってできた林のことです。この巨樹・巨木林は、わが国の樹木・森林の象徴的存在であり、良好な景観の形成や野生動物の生息環境、人々の心のよりどころとなるなど、保護すべき自然として重要です。このような巨樹・巨木林の現状を把握するための調査が全国で行われており、本町でも 39 本の巨樹が確認されています。

巨樹・巨木林

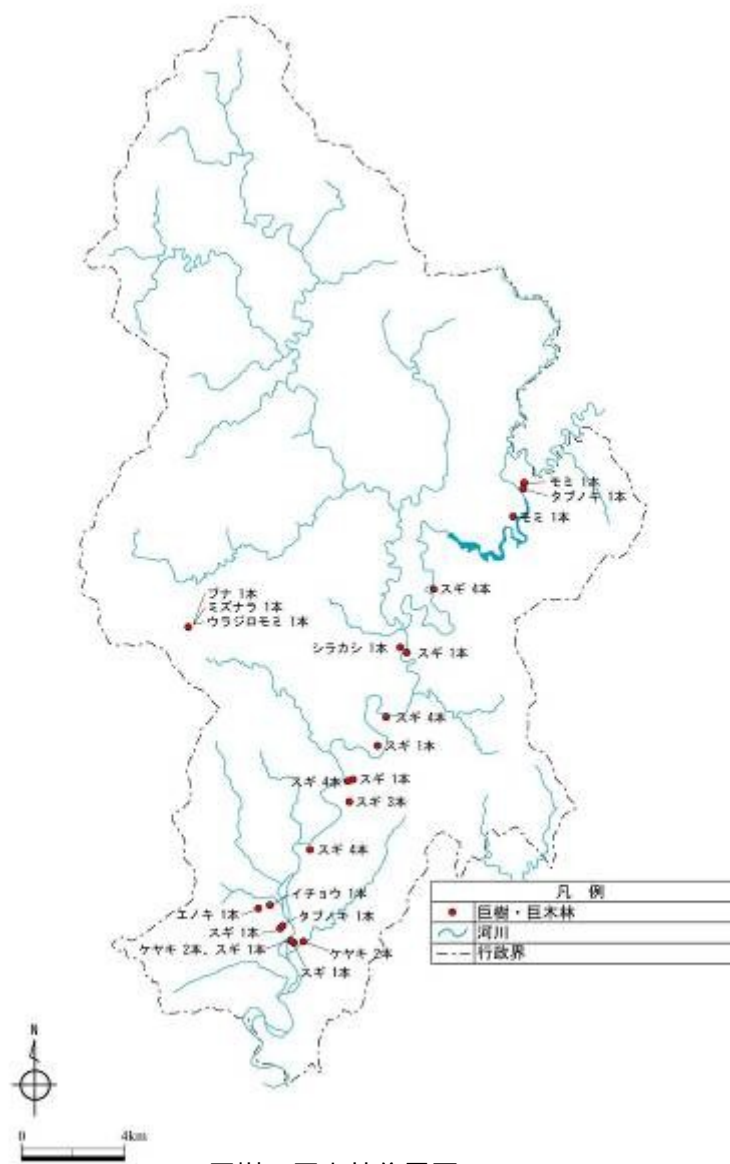
樹種	本数	樹種	本数	樹種	本数
イチョウ	1	ブナ	1	ケヤキ	4
モミ	2	ミズナラ	1	タブノキ	2
ウラジロモミ	1	シラカシ	1	合計	39
スギ ²⁾	25	エノキ	1		

注 1) 巨樹は幹周 300cm 以上。株立ちのものは主幹 200cm 以上、合計 300cm 以上のもの。

注 2) スギ 25 本のうち、3 本が県指定天然記念物。

注 3) 記録にあったアカマツ 1 本、カキノキ 1 本、スダジイ 1 本は現在では既にないため除外した。

【資料：第 4 回自然環境保全基礎調査、日本の巨樹・巨木林（平成 3 年）】



巨樹・巨木林位置図

【資料：第 4 回自然環境保全基礎調査、日本の巨樹・巨木林（平成 3 年）など】

(3)町内に生息する動物

2,260種の動物が確認されています。

本町には原生自然環境保全地域や奥大井県立自然公園をはじめとする森林や、大井川の本支流などがあり、2,260種の動物が確認されています。

山地の森林には、哺乳類、鳥類、両生類などの動物たちが数多く生息しています。光岳周辺などの高山帯では、オコジョ、ライチョウ、クモマベニヒカゲなど、標高の高い場所に特有の種が生息しています。河川には、ヤマトイワナやアカイシサンショウウオなど、県内の限られた場所で見られない動物が生息しています。

哺乳類(40種)

標高の高い場所のみに生息するアズミトガリネズミ、ヤチネズミ、オコジョ、山地帯から低地帯でも見られるノウサギ、タヌキ、イタチなどが生息しています。また、クロホオヒゲコウモリ、ヤマネなどの豊かな森林が広がる地域に見られる種や、静岡県内に分布する大型哺乳類の5種(ニホンザル、ツキノワグマ、イノシシ、ホンドジカ、カモシカ)すべてが生息するなど、多種多様な哺乳類が確認されています。



モモジロコウモリ
(絶滅危惧類)

なお、絶滅の可能性のある種として、モモジロコウモリやカワネズミなど18種が確認されています。

絶滅の可能性のある哺乳類

カテゴリー区分	絶滅の可能性のある哺乳類
絶滅危惧類(VU)	モモジロコウモリ
準絶滅危惧(NT)	カワネズミ、コキクガシラコウモリ、キクガシラコウモリ、ムササビ、カヤネズミ
情報不足(DD)	フジホオヒゲコウモリ、クロホオヒゲコウモリ、コテングコウモリ、テングコウモリ、モモンガ、ヤマネ、オコジョ
分布上注目種等(N-)	ミズラモグラ
部会注目種(N-)	ウサギコウモリ、ニホンリス
環境省レッドリストのみに掲載されている種	アズミトガリネズミ(NT)、ノレンコウモリ(VU)

注1) カテゴリー区分は、静岡県版レッドデータブックの区分に従った。カテゴリーについての詳細は「(4)絶滅の可能性のある動植物」を参照。

注2) 太字は種の解説あり。

モモジロコウモリ (絶滅危惧類)

頭胴長 44~63mm、体重 5.5~11g。体色は灰黒褐色で、下腹部から大腿部には本種の名前の由来となっている白い毛が生えています。廃坑やトンネル跡などで数頭~数百頭の集団で休眠します。ガヤカゲロウなどの飛翔昆虫を食べています。

カワネズミ (準絶滅危惧)

頭胴長 94~144mm、体重 24~56g。周辺が森林で覆われた水の澄んだ山間の溪流に生息します。水中を泳ぎながら魚、水生昆虫、サワガニなどを食べています。

オコジョ (情報不足)

頭胴長 182~198mm、体重 100g(雄)。亜高山帯から高山帯に分布します。肉食性でネズミ類、鳥類などを食べています。背面の体毛は、夏は濃い茶褐色、冬は白色になります。

鳥類(118種)

南アルプス周辺の高山帯には特別天然記念物のライチョウや、ホシガラス、イワヒバリ、カヤクグリなど、亜高山帯にはエゾムシクイ、ルリビタキ、コマドリなど、山地帯から低地帯ではウグイス、ホオジロ、エナガ、シジュウカラなどが生息しています。

川原や溪流沿いでは、ヤマセミ、カワセミ、カワガラスが、ダム湖にはオシドリなどが見られます。

なお、絶滅の可能性のある種として、ライチョウやヤマセミなど29種が確認されています。



ヤマセミ（絶滅危惧類）

絶滅の可能性のある鳥類

カテゴリー区分	絶滅の可能性のある鳥類
絶滅危惧 A 類(CR)	イヌワシ、 ブッポウソウ 、チゴモズ
絶滅危惧 B 類(EN)	ミゾゴイ、 コノハズク 、 アカショウビン 、サンショウクイ
絶滅危惧 類(VU)	トモエガモ、ハチクマ、オオタカ、ハイタカ、サシバ、クマタカ、ハヤブサ、 ライチョウ 、アオバズク、ヨタカ、 ヤマセミ 、コサメビタキ
準絶滅危惧(NT)	ヤマドリ、イカルチドリ、アリスイ、オオアカゲラ、 サンコウチョウ 、ミヤマホオジロ、フクロウ
分布上注目種等(N-)	ノビタキ
環境省レッドリストのみに掲載されている種	オシドリ(DD)、オオコノハズク(DD)

注1) カテゴリー区分は、静岡県版レッドデータブックの区分に従った。カテゴリーについての詳細は「(4)絶滅の可能性のある動植物」を参照。

注2) 太字は種の解説あり。

ブッポウソウ（絶滅危惧 A 類）

全長約 30cm。頭部は黒色で嘴は赤く、体は青緑色の美しい鳥です。社寺林や山地の林の樹洞、河川に架かる橋桁の隙間に営巣します。最近は樹洞のある大径木の減少、餌になる昆虫類の減少などから、個体数が減少しています。

コノハズク（絶滅危惧 B 類）

全長約 20cm。日本のフクロウ類の中では最小の種です。落葉広葉樹林に生息し、樹洞に営巣します。鳴き声は「ブッポウソウ」と聞こえるため、声のブッポウソウと呼ばれます。ブナ林の伐採などで生息環境が減少しています。

アカショウビン（絶滅危惧 B 類）

全長約 27cm。大きな赤いくちばしが特徴の夏鳥です。魚、昆虫などの小動物を食べています。姿を見ることは難しいですが、渓谷沿いで「キョロロロロ」という鳴き声を聞くことができます。長島ダム周辺でも確認されています。

ライチョウ（絶滅危惧 B 類）

全長約 36cm。2,500m 以上の高山帯に生息する氷河期の遺存種で、光岳南部のハイマツ林などに生息しています。夏は褐色、冬は純白の羽毛に変化します。国の特別天然記念物となっています。

ヤマセミ（絶滅危惧 類）

全長約 28cm。白と黒の鹿子模様で嘴は長く、頭の羽は長く冠状になります。山地の溪流やダムに生息し、水中に飛び込んで魚を捕食します。川沿いの土手の崖に横穴を掘って営巣しますが、護岸工事などにより、営巣に適した崖が減少しています。川根本町の「町の鳥」にもなっています。

爬虫類(9種)・両生類(14種)

爬虫類ではトカゲ、シマヘビ、アオダイショウなど、両生類ではトノサマガエル、モリアオガエル、カジカガエルなどが確認されています。サンショウウオ類では、県内に分布する3種(ハコネサンショウウオ、アカイシサンショウウオ、ヒダサンショウウオ)すべてが確認されています。



カジカガエル(準絶滅危惧)

なお、絶滅の可能性のある種として、アカイシサンショウウオやカジカガエルなど11種が確認されています。

絶滅の可能性のある爬虫類・両生類

カテゴリー区分	絶滅の可能性のある爬虫類・両生類
絶滅危惧 B類(EN)	アカイシサンショウウオ
絶滅危惧 類(VU)	ヒダサンショウウオ、ハコネサンショウウオ、ニホンアカガエル
準絶滅危惧(NT)	モリアオガエル、カジカガエル
情報不足(DD)	ナガレタゴガエル
分布上注目種等(N-)	トカゲ
部会注目種(N-)	アズマヒキガエル、トノサマガエル
環境省レッドリストのみに掲載されている種	イモリ(NT)

注1) カテゴリー区分は、静岡県版レッドデータブックの区分に従った。カテゴリーについての詳細は「(4)絶滅の可能性のある動植物」を参照。

注2) 太字は種の解説あり。

>

アカイシサンショウウオ (絶滅危惧 B類)

全長120~140mm。標高500~1,000m程度の森林に生息しています。生態については不明な点が多いですが、繁殖場所は溪流の源流部の地下の伏流水中と考えられています。幼体や成体は、溪流周辺の林床で生活します。

ハコネサンショウウオ (絶滅危惧 類)

全長132~190mm。県中部では標高1,000m前後の場所で主に確認記録があります。5~6月頃、水が湧き出る岩盤の隙間や地下の伏流水中に産卵します。変態後は山の斜面に分散し、湿った倒木や岩の下に隠れ、夜間や雨の日に活動します。

モリアオガエル (準絶滅危惧)

体長42~82mm。主に山地の森林域に生息します。繁殖期には池、沼、水溜まりなどに集まり、止水の上に張り出した枝などに白い泡状の卵塊をつくります。

カジカガエル (準絶滅危惧)

体長33~80mm。河川の中流域で多く見られます。繁殖期には河川に集まり、それ以外の時期は森林の樹上で生活します。

トカゲ (分布上注目種等)

全長180~240mm。海岸に近い低地から高地まで見られ、県内では富士川以西や富士山の東側の一部に分布します。ミミズ、クモ、コオロギなどを捕食します。

アズマヒキガエル (部会注目種)

体長100~130mm。森林や耕作地などで見られます。繁殖期には、メスをめぐってオス同士が争う「ガマ合戦」が見られます。ミミズや昆虫類などを捕食します。

魚類(12種)

魚類の多くはオイカワ、アマゴなど一生を淡水で過ごす純淡水魚で、海と往来する回遊魚はほとんど見られません。大井川本流にはウグイ、シマドジョウ、カワヨシノボリなどが生息し、寸又川の源流部は県内でも数少ないヤマトイワナの生息地となっています。



アマゴ(分布上注目種等)

なお、絶滅の可能性のある種として、ヤマトイワナやアマゴなど4種が確認されています。

絶滅の可能性のある魚類

カテゴリー区分	絶滅の可能性のある魚類
絶滅危惧 B類(EN)	アカザ、ヤマトイワナ
分布上注目種等(N-)	アマゴ、カワヨシノボリ

注 1) カテゴリー区分は、静岡県版レッドデータブックの中部地域の区分に従った。カテゴリーについての詳細は「(4)絶滅の可能性のある動植物」を参照。

注 2) 太字は種の解説あり。

>

アカザ (絶滅危惧 B類)

全長 12cm。護岸整備がほとんど行われておらず、水質汚濁もほとんどない、自然が豊かな川の上流域下部から中流域上部にかけて生息します。昼間は巨石の隙間などに潜み、夜間活動します。水生昆虫などを食べています。

ヤマトイワナ (絶滅危惧 B類)

全長 25cm。大河川の源流域から上流域にかけて生息しています。盛夏の水温がおよそ 15 未満の水域に分布し、主に淵を生息場所とします。生息環境の悪化やニッコウイワナの放流により、生息地、個体数が少なくなっています。落下昆虫や流下昆虫などを食べています。

アマゴ (分布上注目種等)

全長 25cm。天然分布域は神奈川県の酒匂川以西の本州太平洋・瀬戸内海岸、四国、九州瀬戸内海岸です。静岡県内では小河川を除きほぼ全域に天然分布していますが、各地で放流が行われています。年間を通じて水温が 20 以下の渓流域に生息します。水生昆虫や落下昆虫などを食べています。

カワヨシノボリ (分布上注目種等)

全長 6cm。太平洋側の分布東限は富士川となっています。川の上流域から中流域に分布します。淵から流れの緩やかな瀬にかけて生息し、水生昆虫や付着藻類を食べています。

昆虫類(2,037種)

南アルプス周辺の森林限界から高山帯にかけてはベニヒカゲ、ミヤマシロチョウ、テカリダケフキバツタなど、亜高山帯ではキベリタテハ、ウラジャノメ、コエゾゼミなど、山地帯ではメスアカミドリシジミ、ヒメキマダラヒカゲ、アカアシクワガタ、ルリボシカミキリなど、低地帯ではウスバシロチョウ、ツマグロヒョウモン、ヒメハルゼミ、ノコギリカミキリ、ミルンヤンマなどが生息しています。



テカリダケフキバツタ (情報不足)

なお、絶滅の可能性のある種として、クロシジミやテカリダケフキバツタなど 22 種が確認されています。

絶滅の可能性のある昆虫類

カテゴリー区分	絶滅の可能性のある昆虫類
絶滅危惧 B 類(EN)	チャマダラセセリ
絶滅危惧 類(VU)	クロシジミ、オオチャバネセセリ
準絶滅危惧(NT)	コサナエ、ミヤマシジミ、オオミスジ、クロヒカゲモドキ
情報不足(DD)	テカリダケフキバツタ、オオチャイロハナムグリ、ヒゲコガネ
分布上注目種等(N-)	コキマダラセセリ、ウスイロオナガシジミ、オナガシジミ、コムラサキ、ミヤマシロチョウ、ベニヒカゲ、クモマベニヒカゲ、ウラジャノメ
部会注目種(N-)	フジミドリシジミ、オオムラサキ
環境省レッドリストのみに掲載されている種	オオナガレトビケラ (NT)、 ツマグロキチョウ (VU)

注 1) カテゴリー区分は、静岡県版レッドデータブックの区分に従った。カテゴリーについての詳細は「(4)絶滅の可能性のある動植物」を参照。

注 2) 太字は種の解説あり。

チャマダラセセリ (絶滅危惧 B 類)

開張 25mm の暗褐色に白斑をもつセセリチョウで、食草はミツバツチグリやキジムシロなどです。成虫は 5 月と 7 月末の年 2 回出現し、蛹で越冬します。食草の生育する草原で草刈りや放牧が行われなくなったため、遷移が進行してしまい、生息環境が減少しています。(30~40 年前には町内にも生息していましたが、現在は未確認となっています。: 以上聞き取り)

クロシジミ (絶滅危惧 類)

開張 32~40mm。地色は暗褐色で、雄は弱い紫色の輝きがあります。幼虫は 1~2 齢期にアブラムシ類などの分泌物を食べ、その後クロオオアリの巣の中で生活します。成虫は若い雑木林とその周辺の草原に生息します。雑木林及び草原の減少により、個体数が減っています。

コサナエ (準絶滅危惧)

体長 42~46mm、黒地に黄色い条斑がある小型のサナエトンボです。成虫は 4~6 月に出現し、抽水植物が繁茂する池沼などに生息します。

テカリダケフキバツタ (情報不足)

体長約 20~30mm。南アルプス光岳付近で確認されているだけの、極めて狭い範囲に分布する種です。成虫は 8 月下旬から 10 月に出現します。

陸・淡水産貝類(30 種)

陸上に生息するオクガタギセル、カサキビ、ミスジマイマイ、淡水に生息するカワニナ、サカマキガイなどが確認されています。亜高山帯の石灰岩地は、ナガナタネガイの県内唯一の確認場所となっています。

なお、絶滅の可能性のある種として、ナガナタネガイやカサネシタラガイなど 15 種が確認されています。



モノアラガイ(準絶滅危惧)

絶滅の可能性のある陸・淡水産貝類

カテゴリー区分	絶滅の可能性のある陸・淡水産貝類
絶滅危惧 類(VU)	ナガナタネガイ、オオトノサマギセル、ツバクロイワギセル、ミノブマイマイ、クロイワマイマイ
準絶滅危惧(NT)	モノアラガイ、ヒラマキミズマイマイ、オクガタギセル、カサネシタラガイ
環境省レッドリストのみに掲載されている種	ツメギセル、コケラマイマイ(以上 NT)、オオウエキビ、カントウベッコウ、キヌツヤベッコウ、クリイロベッコウ(以上 DD)

注 1) カテゴリー区分は、静岡県版レッドデータブックの区分に従った。カテゴリーについての詳細は「(4)絶滅の可能性のある動植物」を参照。

注 2) 太字は種の解説あり。

ナガナタネガイ（絶滅危惧類）

殻高 2.3mm、殻径 1.2mm の微小貝。山地帯に生息し、県内では川根本町内の亜高山帯の石灰岩地に生息が限られています。この生息地は原生自然環境保全地域内にありますが、人の立ち入りが目立ち、生息環境の悪化が懸念されています。

モノアラガイ（準絶滅危惧）

殻高 10～20mm、殻径 8～15mm。比較的きれいな池沼や流れの緩い河川に生息します。

カサネシタラガイ（準絶滅危惧）

殻高 1mm、殻径 1.7mm の微小貝。県内では中部と西部の山地に分布します。溪流近くの広葉樹林内で、林床の傾斜が急な礫地でよく見つかります。

(4)絶滅の可能性のある動植物

静岡県版レッドデータブック掲載種が 201 種、環境省版レッドリストのみの掲載種が 19 種、合計 220 種の絶滅の可能性のある動植物が確認されています。

本町では絶滅の可能性のある動植物として、静岡県版レッドデータブックに掲載されている 201 種、環境省版レッドリストのみに掲載されている 19 種の合計 220 種が確認されています。ただし、植物のニッケイとハクチョウゲは環境省版レッドリストに掲載されていますが、栽培・逸出したものであるため種数から除外しました。

静岡県版レッドデータブックでは、絶滅の可能性を下表のようなカテゴリーで分類しています。

静岡県版レッドデータブックのカテゴリー区分と確認種数

カテゴリー区分	基本概念	本町での確認種数		
		植物	動物	合計
絶滅(EX)	本県で既に絶滅したと考えられる種	0	0	0
野生絶滅(EW)	飼育・栽培下でのみ存続している種	0	0	0
絶滅危惧類(CR + EN)	絶滅の危機に瀕している種	22	11	33
A類(CR)	ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの	3	3	6
B類(EN)	A類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの	19	8	27
絶滅危惧類(VU)	絶滅の危険が増大している種	51	23	74
準絶滅危惧(NT)	存続基盤が脆弱な種	19	22	41
情報不足(DD)	評価するだけの情報が不足している種	0	11	11
絶滅のおそれのある地域個体群(LP)	地域的に孤立している地域個体群で、絶滅のおそれが高いもの	0	0	0
要注目種(N)	本県独自のカテゴリー	23	19	42
現状不明(N-)	現状が不明な種	4	0	4
分布上注目種等(N-)	絶滅の危険性は小さいが、分布上注目される種	4	13	17
部会注目種(N-)	その他各部会で注目すべきと判断した種	15	6	21
静岡県版レッドデータブック掲載種 合計		115	86	201
静岡県版レッドデータブックには掲載されていないが、環境省版のレッドリストに掲載されている動植物		6	13	19
合計		121	99	220

【資料：まもりたい静岡県の野生生物（県版レッドデータブック 2004） など】

(5)外来生物

本町でも多くの外来生物が確認されており、そのうちの 3 種は特定外来生物に指定されています。

ここでいう「外来生物」とは、人間の活動によって外国から入ってきた生物のことを指し、現在分かっているだけでも 2,000 種以上の外来生物が日本に生育・生息しています。

平成 17 年 6 月に施行された「外来生物法」では、生態系や人の生命・身体、農林水産業へ被害を及ぼすものなどの中から「特定外来生物」を指定し、飼育、栽培、保管、運搬、輸入などが原則禁止されました。

本町では、植物のオオキンケイギク、オオハongoソウ、鳥類のソウシチョウの 3 種の特定外来生物が確認されています。

オオキンケイギク（特定外来生物）

北アメリカ原産のキク科の多年草です。花が鮮やかな黄色で美しく、根がよく発達し荒地でも育つため、観賞や緑化によく利用されてきました。繁殖力が強く全国的に野生化し、路傍や河川敷にしばしば大群落をつくっています。そのため、在来生態系への影響が危惧されています。

オオハongoソウ（特定外来生物）

北アメリカ原産のキク科の多年草です。明治中期に園芸植物として渡来し、緑化などに用いられてきました。全国的に野生化しており、路傍、荒地、湿原、河川敷などに生育します。肥沃な湿地に盛んに繁殖するため在来植生に影響が出始めており、国内各地で駆除作業が行われています。

ソウシチョウ（特定外来生物）

全長 14cm。眉斑から頬は薄い黄色、胸部は濃いオレンジ色、翼に黄色と濃い赤の斑紋がある美しい鳥です。一般的にはササ類の繁茂する標高 1,000m 以下の常緑広葉樹林、落葉広葉樹林に生息します。江戸時代から飼育の記録があり、過去に飼育されていた個体が逃げたり、放鳥されたりした個体が分布を広げているようです。近年、本町では山犬段周辺（標高 1,600m）で多く見られるようになりました。

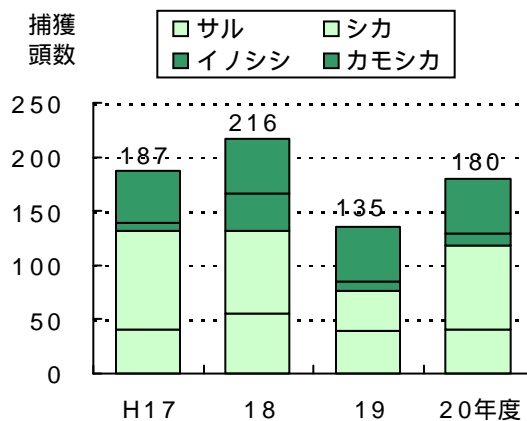
(6)有害鳥獣

シカ、カモシカ、サル、イノシシなどによる農林業への被害が増加しています。

シカ、カモシカ、サル、イノシシなどによる農作物や林産物などへの被害が増加しています。

平成 20 年度の有害鳥獣捕獲頭数は、シカが 77 頭、カモシカが 50 頭（個体数調整）、サルが 41 頭、イノシシが 12 頭の合計 180 頭でした。ここ 3 年間では、平成 18 年度に 216 頭を記録しています。個体が移動することもあり、年によって捕獲頭数は異なるものの、農林業への被害は増加しています。その原因のひとつとしては、高齢化などにより狩猟者数が減少していることがあげられます。

なお、「鳥獣による農林水産業等に係る被害の防止のための特別措置に関する法律」が平成 20 年 2 月に施行され、本町でも「被害防止計画」の策定を検討しています。



有害鳥獣捕獲実績

【資料：産業課】